

# ルイズ・ミシエルの詩学

金山 富美

## はじめに

ルイズ・ミシエルは、大佛次郎著『パリ燃ゆ』にもその活躍ぶりが描かれたように、世界初の労働者による自治政権パリ・コミューンの女性闘士として知られている。彼女は革命の指導者ではなく、単にコミューズの一人に過ぎず、当時の美の基準には合致しない<sup>1)</sup>、40歳を超えた一介の教師であったにもかかわらず、「赤い処女」という形容を冠されて、ドラクロワが1830年の7月革命に想を得て描いた『民衆を導く自由の女神』にも比する一つのシンボルとなった。このような例は、他の女性活動家<sup>2)</sup>には見られない。

ルイズ・ミシエルに象徴されたものは、いわゆるプロレタリアートの夢の実現に限定されるものではない。1905年、自ら久しく無政府主義者と名乗っていた彼女が亡くなった時、葬儀には、主張を分かち合う者ばかりではなく、共和主義者、社会主義者、革命労働党员、フリーメーソン、反軍国主義者、女性運動の活動家など、互いに敵視し合うことも少なくない様々な党派の人々に加え、未来を担う若者、さらに社会の底辺で喘ぐ庶民など、実に多くの多様な面々が押し寄せ、「われらがルイズ」を慕い涙した。この事実は、ルイズ・ミシエルがイデオロギーや階級の違いにかかわらず、幸福とその実現を求めるあらゆる人々と心通わせることができ、そのための革命的情熱をかきたてることのできる稀有な人物であったことを物語る。

その「ルイズ・ミシエル」はいかにして形成されたのか。この女性がわれわれ日本人の想像をはるかに超えてフランスの人々の心に深く刻まれ、現在もなおその魅力を失っていないという状況<sup>3)</sup>を考える時、銃を手に戦場に赴き、

---

1) ルイズ・ミシエルは鼻も口も大きく、たくましい顎と哲学者のような広い額の男性的な風貌をもち、異性からはしばしば「女性的なもの」をまったく感じないと言われた。

2) パリ・コミューンにおいては、小説家でもあったアンドレ・レオ、思考と実行の女性労働者ナタリー・ルメル等、きわめて精力的で実効的な活動をした女性が少なくない。フランス人の他に、ポーランド出身の社会主義者ポール・マンクも挙げられる。Voir notamment : EICHNER, Carolyn J. *Surmounting the Barricades - Women in the Paris Commune* -, Indiana University Press, 2004.

自ら身を挺してヴェルサイユ政府と格闘した活動家とは異なる、別の本領を問いただして見るべきだろう。実際、ルイズ・ミシュルに関する伝記の数々は、彼女が活動家である以上に優れた扇動者であった様子を素描する。しかし、そのことについて特に言及しているわけではない。

多くの人間をある方向へと鼓舞する際、何より大きく作用するのは言葉の力であろう。晩年の彼女が激動の時代を書き留めた『コミュニケーション、歴史と思い出』<sup>4)</sup>は言葉の洪水であり、とりわけ数多くの詩で彩られていることを思い出したい。それは彼女の他の著作、書簡にもまた顕著である。事実、ルイズ・ミシュルは「詩人」であった。

本論考では言葉の紡ぎ手としてのルイズ・ミシュルに光を当て、主に彼女の書簡を通してその思想的変遷について考察するとともに、多くの人々の心を捉えた彼女の言葉の特質とその背景を明らかにしていきたい。

## I ユゴーの「妹」：抒情詩人の時代

ルイズ・ミシュルの出生には謎が多く<sup>5)</sup>、生来明朗な彼女の性格に暗い陰を落とす。それは人生の選択にも大きく関与することになる。

女中の娘であるはずのルイズを実の孫娘のように慈しみ、彼女の知的な、また精神面の導き手ともなっていたドマイ老侯爵が亡くなり、それから5年後にはその夫人である「お祖母様」が危篤に陥って、人生の後ろ盾をことごとく失うかと思われた1850年、20歳の彼女がはじめて胸の内を明かしたのは、かのヴィクトル・ユゴーであった。

すでに大詩人としての地位を不動のものとして、当時は政治家としても活躍し、大統領となったルイ＝ナポレオンや資本家と闘争の日々を送っていたユゴーに、ルイズは自らしたためた詩を次々と送り、ほどなく自身の出自に関わる悲痛な思いを吐露する。ユゴーに送られた現存する最初の手紙には、『夢』

3) 2013年2月、晩年のルイズ・ミシュルを主人公にした劇作品『ルイズの視線に *Dans le regard de Louise*』(脚本ジョルジュ・デュブイ) がパリで上演されている。

4) MICHEL, Louise. *La Commune, histoire et souvenirs*, La Découverte, 1999.

5) ルイズは、ドマイ侯爵家の女中を母に庶子として生まれた。母親から父親は侯爵家の跡取り息子だと聞かされていたが、その「父」から本当の父親は彼女が「お祖父様」と敬愛する老侯爵であると知らされ、以後生涯にわたり自らの存在の罪深さに苦しんだ。Voir : MICHEL, Louise. *Je vous écris de ma nuit – Correspondance Générale 1850–1904*, Les Éditions de Paris, 1999, p.49.

と題する詩が綴られた<sup>6)</sup>。

われは悲しい おお 詩人よ / そなたの青き月桂樹のもと  
 深き安息を得 / こうべをのせて / 夢見、祈る  
 そなたの豎琴の陰に / 休息を見出し / そなたの船上に眠れば  
 風そよぎ / 波の揺り籠に揺する

[中略]

ユゴー、教えて / いかなる天使が詩情を与え / いかなる不思議が  
 そなたの声に融け / いかなる神がそなたに歌わせるのか

煌めく光であるそなた / 王、輝かしい太陽 / そのまばゆい軌道が  
 迷える哀れなわが星を / 熱く満たしてくれるように [中略]

われに応えよ / 神の呼びかけのごとく / 現世の騒音の遙か遠くより  
 風と波の間を通い来る / 天からの一陣の風の中に

われは頼りなき夢想家 / ただ詩を放つ / 嵐の大海原へと  
 心強くして / 人の情を動かしたいと願う [中略]

苦悩、身を焦がす夢 / おお 兄よ、示したまえ / そはわが魂ゆえに  
 咎められ罰せられても / われはただそなたを信ずる

美しい夢が輝く / 薄雲のはざまに / われはただユゴーに願う  
 詩をつむぐわれの冠に / そなたの月桂樹を一葉なりと

70行にわたり堰を切ったように流れる言葉は、ルイーズの心の混迷、生き辛さを物語り、詩に託すことしか苦悩を和らげる術をもたない状況を彷彿とさせる。ドマイ老侯爵夫妻の死は、彼女にとってエデンの園の終焉であり、結婚という道をあえて選択しなかったこともあって、奉公先を失った母を彼女自身がいかにか支えていくのかについても決断すべき時期にきていたのである。「神」

<sup>6)</sup> *Je vous écris de ma nuit*, pp.38-39.

という語彙の繰り返しには、当時の彼女の心を捉えていたカトリックへの信心を垣間見ることできる。

複数形で表現される詩のタイトル『夢 *rêves*』は、日々の苦悩からしばし逃れるために詩を紡ぎ、その世界に心を自由に遊ばせる夢の時間を意味するのと同時に、未来への展望、そうでありたいと熱望する自らの将来像を示している。

彼女の望みは詩人として身を立てることにあつた。正確には「ユゴーのような詩人」である。その深い心酔は、『秋の木の葉』に始まる彼の抒情詩集に倣い、自身の魂のありようを自然にこと寄せて歌う姿勢から理解されるのはもちろんだが、ユゴーに対して用いる「王」「光」の形容に凝縮されている。青年時代のユゴーが己に誓った「シャトブリヤンになりたい、さもなければ無」にも似た熱烈な信条を、ルイズはユゴーに対して抱いていた。

ユゴーへの傾倒は、文学上の憧れにとどまっではない。ユゴーに「兄」と呼びかけ、「そはわが魂」の歌う娘は、自身が約20歳離れた大作家と同じ血、同じ精神、詩人としての素養を分かち合っていると信じて疑わない。このことには、ルイズの育った環境も関与している。

シャンパーニュ地方南東のオート＝マルヌ県、ヴロンクール＝ラ＝コート村の、村人に「大きな墓石」と呼ばれる館、「生まれた頃からすでに廃墟のようなたたずまい」をした「南に窓ひとつなく、氷のように冷たい石の壁」に囲まれた城館がルイズを育んだ。その北側には深い森を控えた広大な土地があり、荒々しいが豊かで神秘的な自然に親しみ、心安らぎ、慰めを得る多感な日々を過ごしたと、彼女はユゴーに告げている<sup>7)</sup>。そこに漂うのは、たとえば『内心の声』の「凱旋門によせて」「アルベルヒト・デューラーに」といった作品にユゴーが歌い上げた美しき廃墟、自然との交感とその偉大なる力への賛美、過去と現在との内的往来<sup>8)</sup>の情景であり、他のロマン派の詩人の作品と引き比べて、ピエール・アルブイがとりわけユゴーに指摘する神秘的かつ神話的な世界観<sup>9)</sup>と重なる。

ルイズのこうした傾向は、修道女であった母方の叔母を通して、幼い頃からキリスト教の霊的世界や中世以来その地に口伝の唄、伝説を語り聞かされて

<sup>7)</sup> *ibid.*, p.43.

<sup>8)</sup> Voir : HUGO, Victor. « À l'Arc de triomphe » « À Albert Durer » in *Les Voix intérieures*, Gallimard, 2002.

<sup>9)</sup> Voir : ALBOUY, Pierre. *La Création mythologique chez Victor Hugo*, José Corti, 1963.

きたことにもよる。ヴォルテール主義者であるドマイ老侯爵の館で芸術や学問の手ほどきを受け、人間の進歩への情熱をかきたてられる一方で、科学的には説明しえない人知の及ばぬ力に魅せられ、それが一つの心的素養とまでなっていたのである。ユゴー的抒情詩の世界は、ルイズが老公爵の手引きでユゴー詩集の頁をめくる以前から、身体化されていたとも言えるだろう。

寄る辺を失い、人生における最初の大きな岐路にさしかかったルイズにとって、ユゴーは暗闇の中の唯一の光であった。見知らぬ娘から送られる何編もの詩や、幻想的な戯曲の構想に自らの文学的感覚と合致するものを感じたのだろうか、それとも苦悩の日々を洗いざらい告白しないではいられない藁もすがる姿に胸打たれたのか、驚くことに、ユゴーは返事を返した。それらの手紙は、ルイズのその後の波瀾に満ちた日々の中に消失してしまっただが、ユゴーのもとに残る彼女の手紙をたどると、作家がどれほど温かく応えたのかが想像できる。

ルイズは暗闇の中の一筋の「光」であるユゴーとの文通を心の励みに、いつか自らも抒情詩人として独り立ちする夢を抱きながら、当面は教員の道を選ぶことにする。第二共和政下、1850年のファルー法が住民800人以上の市町村に女子小学校を最低一校設置することを義務化していた時期であった。海のないヴロクールの村に生まれ育ったルイズは母を故郷に残し、自らが詩に歌い、おののきながらも憧れる人生という「嵐の大海原」へと船出する。

## Ⅱ 「ア・ベ・セー」の詩人：社会派詩人への脱皮

ルイズがパリから30キロのところにあるラニーの寄宿学校、さらにオート＝マルヌ県県庁所在地ショーモンの学校で勉学を続け、1852年に初等教師資格を得るまでの間、ユゴーは野心を顕にしたルイ＝ナポレオンへの服従を拒み、ジャージー島へ逃れている。彼は恩赦の提言を頑として拒否し、『小ナポレオン』『懲罰詩集』を出版し、吠えた。

人の良心は死んだ。乱痴気騒ぎの中で、  
あやつは良心の死骸の上にうずくまるのがお気に入り。  
時に陽気に、勝ち誇り、血走った目をして、  
振り向いては、死んだ良心に平手打ちをする。

[中略]

われは屈せず！繰り返言など言わず、  
 泰然と、喪の悲しみを抱き、羊の群れのような群衆を軽蔑しながら、  
 亡命の立場を守り抜き、そなたを抱き続けよう。  
 祖国よ、おお、わがぬかづく祭壇よ！自由、わが掲げる旗よ！

[中略]

たとえ千人しか残らないとしても、われはその一人になろう！  
 たとえ百人しか残らないとしても、それでもスラと戦おう。  
 それが十人となっても、その十人目にわれはなろう。  
 そして最後に一人残るとすれば、われこそ、その者である！<sup>10)</sup>

ユゴーは皇帝の座についたナポレオン3世を古代ローマの独裁者スラにたとえ、事に及べば自らの生命を賭ける決意をこの詩 *Ultima Verba*<sup>11)</sup> に込めた。「兄」の敵は自身の敵である。小学校教師は女性にとってこのうえない仕事と思われたが、ルイーズは皇帝への忠誠を要求するこの職を拒否し、私塾教師としてパリに上る。

1858年1月に祖国イタリアへの愛とヨーロッパの平和のために皇帝暗殺を企てたオルシニに対して、ユゴーへの思慕、そして素朴な正義感と人間愛を抱くルイーズが深く感動したのも不思議なことではなく、見知らぬ青年の恩赦を請願して、嫌悪するナポレオン3世に手紙まで送っている。そして程なく、第二帝政下の大公共事業が進められるのに従い膨張を続けるパリで、日々社会の矛盾を目の当たりにするなか、ルイーズ自身が何かをなさねばならないと考えるようになる。

モードに身を包んだ裕福な階層がゆったり暮らす豪華な界隈、しかしその一方には赤貧にあえぐ人々の街があった。まだ改造計画が及んでいないそうした地域には糞尿の匂いが漂い、淀んだ空気の中で自身の肉を切り売りして生きる娼婦の姿があった。自身がかつて見、今もそれに手を伸ばそうとしている「夢」さえ見ることを忘れた哀れな人々の状況に、ルイーズは胸を痛める。

この頃から、ルイーズ・ミシュルの「夢」である詩は、自身の内に向かう抒情的な内容から、外へと開くより具体的なものへと変貌を遂げていく。

<sup>10)</sup> Voir : HUGO, Victor. 《XVII Ultima Verba》, *Les Châtiments*, Gallimard, 1977, pp.280-283.

<sup>11)</sup> 詩集の終盤に置かれるこの詩は一般に「結語」と邦訳されるが、「遺言」の意味を含む。

<sup>12)</sup> *Je vous écris de ma nuit*, p.62.

1862年にユゴーへの手紙に添えられた詩<sup>12)</sup>は、ルイーズが文学に見出した新たな役割に興奮を隠せないでいることを伝える。その役割とは、文学の領域に社会を変革する実質的な力を与えることである。詩人連合の会員となった彼女は、それを可能にする文学を追求し、その発信を自らの使命として誓う。

詩人であったのだから、彼らはほとんど神であった  
 そして詩人がその面前に頭を垂れる主は  
     崇高で穏やかであった  
 ああ、なんと美しい！陰鬱なわれらが大地に  
 その詩人、そのキリスト、限界を知らぬその精神は  
     あらゆるなかに、偉大にして善良にして在る！  
 その人の瞳には至高の光である神が輝き、  
 詩人の足下には瞑想するかのように  
     天使がその広大な翼を休めていた。  
 神が一瞥しただけで、不幸な人々はいくらか元気をとりもどし、  
 暗闇の中まくしたてていた数限りない声も、  
     自ら讃え歌おうと望んだ。  
 彼らは言った——その人に栄光を！神に似た人に栄光を！  
 その人には曙と夜が、星々と砂粒が見える、  
     そして正しきものと悪しきものが。  
 その人はあらゆる人を哀れみ、あらゆるものを変貌させる。  
 栄光を！それはヤハウェ！その人の方へ、さざめきのごとく  
 すべてが立ち昇る、その人を讃えて

アンジョルラス

この詩は、まず2つの点でルイーズの中に起こった変化を伝える。ひとつは、詩人と神との関係である。『夢』においては、詩人はいわゆる神の啓示を受けて言葉を紡ぐものであったが、ここでは自身の瞳の中に神を宿し、ほとんど神そのものと化しているのである。ルイーズはその詩人の崇高さを、「不幸な人々」とともに嘆き悲しみ、それら多くの人々が置かれている「陰鬱な大地」に光となる言葉をまくことにあるとする。

もう一点注目すべきは、詩人＝キリスト＝神という三位一体の神をヤハウェ

と呼んでいることである。あえて原始キリスト教の「ありてある者」という表現を引き合いに出していることに、カトリックの教義が示唆する神への懐疑が垣間見える。ヤハウエは、「曙と夜」「星々と砂粒」で示されるように、天から地にわたるあらゆるものをその視野に収め、人の世の「正しきものと悪しきもの」をしかるべく見つめて、試練を与えるが約束も守る「生ける神」である。一方、カトリック教会が語る神は、哀れな人々がいくら祈りを捧げてもそれに応えてくれるとは思われなかった。

ところで、19世紀産業社会は、現実世界に自ら積極的に関わろうとする新しい詩人を生んでいる。その変化の主たる原因は、従来キリスト教にあった人生の意味づけの担い手を詩人が自らのものとして引き受けたためである<sup>13)</sup>。詩人達は従来の聖職者もっていた使命を果たそうと試みた。まさにユゴーが率先してそうであったように。

もちろんルイズも、その系譜をなぞっている。ただし彼女の場合、そこにはとどまらない。ジュール・ファーヴル<sup>14)</sup>の夜間公開講義の受講を通して社会の仕組みについて学習を深め、あたかも新鮮な大気でその身を満たすように共和主義的思想を獲得したわれわれのヒロインは、ユゴーの基盤に依りながらも、この「兄」の眼差しが及ばない世界にまで降りて、新しい詩人の役割を果たそうとする。それを裏付けるのは、1862年9月からルイズが使用するようになったペンネーム「アンジョルラス」である。ジョルジュ・サンドばりに詩の投稿にしばしば署名した男性名ルイ・ミシエルとは異なる、この新しい名前の意味を明らかにしておかなければならない。

このペンネームは、ちょうど半年前にユゴーが発表した『レ・ミゼラブル』の登場人物で、共和主義者の秘密結社「ア・ベ・セーの友」のリーダーの名前である。裕福な家庭の一人息子で、天使のような美青年だが、その情熱が唯一向かう対象である「人間の権利」のためなら、またその障碍となるものを打破するためなら恐ろしい男にもなれる男であり、その創造者ユゴー自身の言葉を借りれば「司教的で、戦士の」「司祭で軍人」「民主主義の兵士」「理想を説く司教」、そして「アウエンティヌス丘に身を置けばグラックスに、国民議会なら

<sup>13)</sup> Voir : BÉNICHOU, Paul. *Romantismes Français, Tome I, Tome II*, Coll. « Quatro », Gallimard, 2004.

<sup>14)</sup> ファーヴルは、オルシニ事件で被告となったオルシニの弁護士を務めた共和主義者。

<sup>15)</sup> HUGO, Victor. *Les Misérables*, Tome I, Garnier, 1971, p.773.

サン＝ジュストになれた男」<sup>15)</sup>、それがアンジョルラスなのだ。

ユゴーが理想とする青年の一タイプを投影した作中人物、アンジョルラスと化したルイズは、ペンの力を通して、日々、権威によって社会にばらまかれる様々な偏見と差別に戦いを挑もうとする。ある時は、「またの名をベネディクト派信者」と自称する某男爵に一編の詩を送り、異議申し立てを行った。その人物は『高く評価されるロマン派の名士』と題する論考の中で、ロマン派の文学者を血統学と信望の観点から分析し、作家アレクサンドル・デュマの系譜が黒人の血が混じった私生児であることをやり玉に上げて、恥ずべき文学者と断じていた。ルイズ・ミシェル「またの名アンジョルラス」は、「貧しい未婚の母ファンティヌ」や「罪なき私生児ガヴローシュ」に憐憫の情をみじんも抱かず、蔑視さえしている「篤志家」と、その「呆れた論考」を掲載する文学雑誌に、穏やかな口調で、しかしきっぱりと抗議を行った<sup>16)</sup>。

ところで、われわれは、パリでもっとも貧しい地区モンマルトルの私塾教師であったルイズ＝アンジョルラスがアンジョルラスだけではなく、「ア・ベ・セーの友」のもう一人の代表的人物、コンプフェールの方とも多くの共通点をもっていることに気づく。コンプフェールは、「戦争賛成の結論になりかねない」「革命の論理」を体言するアンジョルラスとは対照的に、「ただ平和へと帰結する」ことを求め、アンジョルラスよりも考え方に「幅があり」「近づきやすく、実行可能」で、その哲学は「のびのびとし」ている。アンジョルラスが「ロベスピエールにつながる」のに対して、彼は「コンドルセに近く」、「天性の純潔さによってアンジョルラスが厳しいように、コンプフェールは優しかった」。ルイズはコンプフェールと同様「未来は学校の先生に左右される」と確信し、何より「市民という言葉を受す以上に、人間という言葉を受した」<sup>17)</sup>。

さらにまた、ルイズを、もう一人別の「ア・ベ・セーの友」ジャン・プルヴェールと重ね合わせることも可能だ。彼は「何よりもまず善良」で「情にもろく」「人民を愛し」「子供のために泣き」「未来と神を一緒にして信頼」し、「世間の事件に対してとほとんど同じほどの興味を雲に抱いて」「詩をつくる」<sup>18)</sup>人物だ。結局、ルイズ＝アンジョルラスは、「ア・ベ・セーの友」をまるごと自らのうちにとりこんでいると解釈することができるのである。

<sup>16)</sup> *Je vous écris de ma nuit*, pp.64–66.

<sup>17)</sup> *Les Misérables*, pp.774–776.

<sup>18)</sup> *ibid.*, p.777.

この「ア・ベ・セー ABC」が「社会の底辺に生きる人 l'Abaissé」であり、つまりは「民衆」<sup>19)</sup>を意味していることを思い出そう。ルイーズはその民衆の中でももっとも惨めな境遇にあった「ファンティヌ」のような女性はもちろん、ただ非・男性であるがゆえにそれだけで拒絶され、否定されてきた女性のさまざまな状況についても疑問を投げかけた<sup>20)</sup>。ルイーズは、文壇に根強く存在していた女性差別も問題視した。女性を正当な作家とはみなさず、女性に教育を与えたことさえ後悔するとまで言い放つある男性作家に対しては、女性作家の書き物こそ「人間のかつ崇高なもの」を備えており、「闇の中にも光の中にも、自らを犠牲にすることを使命とし、それを成就させようとする何か」がある<sup>21)</sup>と反論を試みた。ルイーズが女性作家に指摘するその優れた姿勢は、何よりもペンをとる際の彼女自身の決意であり、彼女が目指す詩人の姿そのものであると言えよう。

かつて、その言動によって文壇を騒がせたジョルジュ・サンドは60才に近く、すでにノアンに隠遁して「優しい奥方」の立場にあった。ルイーズも以前のサンドと同じくラムネのキリスト教的社会主義思想への傾倒があり、人々を慰め、心の糧となるような作品を創作する姿勢に賛同していたと思われる。ただし、ここまで見てきたように、ルイーズの詩人としての姿勢と思想は、ペンをとる者の社会的責任を、サンドの例がそうであったような精神や心の問題にとどまらせることはしない。また、文学作品と政治という高い演台に立って民衆の声を代弁したユゴーの立場<sup>22)</sup>にそのまま倣うわけでもない。

ルイーズ・ミシュルは「ア・ベ・セー」の詩人として、カトリック教会とナポレオン帝政の権力構造に対する反抗心を胸に、それら権力の下で押しつぶされ虐げられる民衆のすぐ傍らで、哀れな彼らのためにこそ歌おうとする。新しい時代、特にプロレタリアートの時代の幕開けであり受難でもある時に、ユゴー以上に言葉の実効的な力を信じて、その“言霊”を「あらゆるものを変貌させ

<sup>19)</sup> *ibid.*, p.771.

<sup>20)</sup> 「この呪われた社会で、人はいたるところで苦しんでいる。しかし女の苦しみに匹敵するものはない。街路ではおのが肉体を売り、修道院では墓に葬られたかのように隠れて生き、無知に縛られる。この世のしきたりが女を製粉機に取り込み、女の心と脳を粉碎している。[中略] 男は、女が今のままであるよう言い張る。」MICHEL, Louise. *Mémoires*, Maspero, 1977, p.85.

<sup>21)</sup> *Je vous écris de ma nuit*, pp.60-61.

<sup>22)</sup> 民衆の声を代弁者としてのユゴーの姿勢は、彼の作中人物リュイ・ブラースのそれと重ね合わせることができる。

る」エネルギーへと昇華させていくのである。

### Ⅲ 「愛」の詩人：預言者・殉教者として

古今東西、恋愛詩を多く産する女性詩人の中であって、ルイズ・ミシェルはその要素がほとんど見られない稀な人物である。結婚に対しては、おそらく自らが庶子であったという境遇も関わって、自身の人生に組み込むことはなかった。とはいえ、周囲の人間に対しては心からの祝福を表した。

詩人の魅力的な花嫁よ

若き娘、花咲ける白百合のごとき

知りたまえ、吟唱詩人は預言者であることを、

預言しよう、あなたを待つ幸せを<sup>23)</sup>

友人の妹マティルド・ド・モーテとポール・ヴェルレーヌの結婚式に立ち会い、マティルドへの友情の証として歌ったこの祝婚歌には、恋愛や結婚のもつ甘美なイメージは見当たらず、何より年下の親しい娘へのいたわりが印象に残る。自身を「吟唱詩人」と名乗り、それが「預言者」とであると宣言していることも興味深い。

歌を捧げられたマティルドとヴェルレーヌとの結婚は周囲の猛反対を押してのものであった。また新郎が普仏戦争に駆り出される心配もあるなかで、ルイズの温かな眼差しと「預言者」としての幸せの保証は、新婦の心を明るくし、若い二人に新たな人生へと踏み出すための勇気を与えたに相違ない。そうでなければ18年という長い疎遠にもかかわらず、アナキストとなったルイズを温かく迎えたマティルドの行動<sup>24)</sup>はありえなかったであろう。また後年、流浪の詩人となったヴェルレーヌが皮肉をなんら交えずに「貧乏人の荒々しくしゃやなミューズ 彼らの守護天使 その素朴さ、御しがたさ ルイズ・

23) TROYAT, Henri. *Verlaine*, Flammarion, 1993, p.102.

24) ニュー＝カレドニアから帰国した1880年以降、無政府主義を掲げたルイズ・ミシェルは、何度にもわたりフランスはもとよりヨーロッパ各地で講演を行う。1903年からも73歳の病身を抱え、フランス全土と北アフリカを旅した。民衆の暮らしを棚上げのまま軍国主義と植民地主義に猛進するフランス政府への批判は、賛同も得たが、それ以上に多くの野次や脅迫を受けた。1904年12月、ヴェルレーヌとの離婚後にアルジェで建築請負業を営む男と再婚したマティルドは、旅を続けるルイズをしばらく自宅に引き留め休息させている。

ミシエルは素晴らしい]<sup>25)</sup>と歌うこともなかっただろう。

預言を「もっとも雄弁な祈り」と言い換えることは可能だ。預言者は司祭のように、いやしばしば宗教家以上に、自らの口唇にのせた祈りに大きな責任をもち、そのメッセージによって社会や人々をある方向へと導く。「ア・ベ・セーの詩人」であり「預言者」でもあるルイズの言葉は、かの秘密結社の青年達のように自らの命をかけて放たれるだろう。その意味で、ルイズがコミューンの同志テオフィル・フェレに捧げた詩は、もっとも深い祈りを込めた最初の情熱的な詩の一つとして数えることができる。

前述のように、ルイズは恋愛を表明したことはない。『コミューン、歴史と思い出』でもあえて抑えた調子でフェレを語り、15歳年下のこの青年を「弟」のように思うとさえ述べる。しかし、コミューン壊滅後、自らも獄中にありながら、教戒師を介して死刑囚となったフェレに送り届けた数々の手紙と詩<sup>26)</sup>には、愛と呼ぶ以外はない特別な思いが滲み出ている。ユゴー<sup>27)</sup>をはじめ、万に一つなりとフェレの命を救える位置にある人物を見出せば、彼女は躊躇せず手紙を書き送り、フェレに死刑執行を言い渡した第3軍事法廷の裁判長のもとにまでペンを走らせ助命を嘆願した。しかし、その努力もむなしく、フェレの減刑は叶わなかった。

ルイズはフェレへの手紙に添えて2編の詩『赤いカーネーション』『永遠』を書いた。前者は、パリ・コミューン初期から彼女が肌身離さず身につけ、辛い時にはそれを握りしめて自らを励ました赤いスカーフの切れ端を花に見立て、ともに捧げられている。

私が暗い墓へ入ることがあれば、

25) ここでヴェルレーヌは、ルイズをシャルロット・コルデーやテロワーニュ・ド・メリクールなどフランス大革命期のヒロインたちと並べるだけでなく、「ほとんどジャンヌ・ダルクのごとき」と称えている。VERLAINE, Paul, *Ballade en l'honneur de Louise Michel*, (Œuvres complètes, Tome II, Editions Vanier, 1905, p.39.

26) *Je vous écris de ma nuit*, pp.87 - 118.

27) ルイズは獄中で寝ることも惜しみ、コミューンの救済を求めて手紙を書いた。ユゴーは彼女の呼びかけに応じて、無実の囚人達のために骨折り、釈放の後も身寄りのない彼らの面倒を見ている。しかしフェレだけは例外であり、ユゴーにとっては、パリの歴史的建造物の破壊者として伝統に唾した悪人、啓蒙しえない民衆の欠点を増長させてコミューンが初期に備えていた長所を損なわせた責任者の一人だった。『恐ろしき年』の「タリオン」(Avril VI)では、ヴェルサイユ政府のガリフェ將軍に匹敵する残酷さと非人間性の持ち主として糾弾している。

兄弟たちよ、あなたの姉の上に投げてほしい。  
最期の希望のごとき、  
満開に咲き誇る赤いカーネーションを。

帝政の末期、  
民衆が目覚めつつあった時、  
赤いカーネーションは彼らの微笑みそのものであり、  
すべてが再生しつつあると告げた。

今、闇の中で花咲くがよい、  
暗く悲しい牢獄の闇の中で。  
暗澹としたその虜囚の傍らで花咲くがよい、  
そしてその人に告げよ、私たちが彼を愛していることを。

その人に告げよ、時は足早に過ぎ  
あらゆるものは未来へと委ねられるのだと。  
かの勝者は敗れた者以上に青ざめて  
滅びていくであろうと。<sup>28)</sup>

この詩を歌い、それをフェレに捧げたことによって、ルイーズの「社会の底辺に生きる人」つまり民衆に対する愛は、ユゴーのそれ以上に深いものとなっていく。

確かにユゴーは民衆に慈悲の視線を注ぎ、彼らの声に耳を傾けた偉大な人道主義者である。しかし、「哀れにして偉大なる民衆、彼らは軽率で盲目だ！自分が何を望まないのかは知っていても、何を望んでいるのかは分からない」<sup>29)</sup>という表明からもうかがい知れるのは、時に暴力的で理論の通用しない彼らの心にこの詩人の精神が融け合うことは困難であったという事実である。一方、

---

28) *Mémoires*, p.164.

29) HUGO, Victor. *Choses vues*, Coll. « Quarto », Gallimard, 2002, p.516.

ユゴーは民衆の体温や理屈を感じることはできなかった。理想家肌であったがゆえに民衆への失望も深く、次第に政治・社会活動から距離をとり、もとの詩人の世界へと戻っていく。

30) *Je vous écris de ma nuit*, p.103.

モンマルトルで日々もっとも恵まれない庶民と接し、彼らを愛し、彼らに深く慕われていたルイーズも、実際には、当初は民衆と一線を画す面が見られたのである。フェレの救済を切望するあまり、つい「恩知らずな民衆」に「あなたの血を与えてほしくはない」<sup>30)</sup>とペンを滑らせ、コミューンの魂そのものであるとみなすこの青年が死ぬのなら殉死してしまいたいと告白している。しかし、この詩と、ともに送った手紙へのフェレからの返事が、迷えるルイーズを変える。

フェレは以前からの一徹、厳格そして非妥協の姿勢をいささかも崩さず、死刑を徹頭徹尾自らのものと受けとめていた。そして「共和国と人民を一途に愛した一市民」として、「親愛なる市民ルイーズ」に、自らの死が闘争の継承に益するものであることを理解させ、「民衆のために気高く死んだ仲間」の代わりに「数年後の大きな変革をその目で見届けてほしい」<sup>31)</sup>と遺言したのである。

ルイーズがフェレに捧げた詩のタイトル、自らのスカーフで創り上げた赤いカーネーションの花言葉は「情熱の共有」である。ルイーズは「心から敬愛する同志」の遺言に忠実に従う。フェレへの思いを喪に服し、フェレが強く提唱し願ったように、民衆を一途に愛すことを心に誓ったのである。それはまた、フェレへの殉死の望みを、民衆へのたゆまぬ献身を通しての殉教へと転嫁させていくことであった。

ルイーズが無政府主義に開眼するのはそれからまもなく、流刑地ニュー＝カレドニアへ向かう航海の途上、波と風の狂乱の中で「どのような人間であれ権力を手中にすると、弱いか利己的な者なら罪を犯してしまうだろうし、献身的で精力的な者であれば消滅させられてしまう」<sup>32)</sup>と悟ったことである。20歳の頃に『夢』に歌った「嵐の大海原」を見つめながら、コミューンの誕生と崩壊、フェレをはじめとする同朋を偲びつつ、そのように理解したのだ。その後、彼女はその悟りを、植民地化された島での支配者フランス人と被支配者カナカ族との関係を通して再確認するだろう。

ルイーズ・ミシュルにとって、いかなる主義にもいかなる色にも染まらない無政府主義は、どのような世界であれ平和と人間愛を志向する立場をとるということであり、そこでもっとも温かい手を差し伸べるべき対象を社会の底辺に

<sup>31)</sup> *ibid.*, pp.109–110.

<sup>32)</sup> *La Commune*, p.310.

<sup>33)</sup> *ibid.*, Poème « À bord de la Virginie », p.309.

生きる「ア・ベ・セー」の人々に置くということである。こうして彼女は「ア・ベ・セーの友」というより「ア・ベ・セー」と一体となる。民衆がたとえ愚かであろうと、それを含めて彼らの悲しみや喜びを自らのものとし、彼らのために歌い、戦い続けることを決意する。それが「遠くに瞳のように輝いている、失われた世界」<sup>33)</sup>を再生するための手段であり、彼女の人生の目的となる。

ルイーザらしい民衆への愛を歌った一例として、次の詩を挙げておきたい。

彼は、海が吼える岸辺、  
 アルモリカに生まれた息子。  
 荒れ狂う海と、  
 むごいばかりに貧しい土地を眺めながら、  
 慰められるもの何もなく、  
 神秘の中で物思いし、  
 大風にあおられ、苦い潮風のもと故郷を去ったのだ。

[中略]

石の時代の彼の先祖は、  
 月下の夜、メンヒルの下を  
 ヒースの野原を通りつつ、  
 とどろき渡る波音に紛れて彼に語りかけてきた。  
 彼にとって、われらが事象は幻、  
 彼には彼の暗い闘争をさせておくがよい、  
 それは風が泣き叫ぶ闘争だ。  
 この人はわれらにとって祖先のごとき人、  
 森の奥の、洞窟の時代の人である。  
 彼を裁くことができる者があるとすれば、  
 その昔に生きた者でなければならない。<sup>34)</sup>

1888年1月22日、ル・アーヴルで2000人の聴衆の前で講演するルイーザは、一人の暴漢に銃弾を2発撃たれた。一発は右耳たぶをひきちぎり、もう一

<sup>34)</sup> PLANCHE, Fernand. *La vie ardente et intrépide de Louise Michel (1830 – 1905)*, Tops / H. Trinquier, 2005, p.119.

発は左耳後部の骨の中にすっぽりと収まった。弾丸の摘出は不可能で、ルイーゼは一生激しい頭痛に見舞われる。

男はピエール・リュカという名のブルトン人で、コーヒー卸売商の下で薄給生活にあえぎ、アルコール中毒の傾向もあった。たまたまその日、ルイーゼ・ミシュルの演説を熱狂する聴衆の間に身を置いて聴いていたところ、演壇に立つ女が悪魔の使いに思われ、自らが成敗すべきだと感じたらしい。

ルイーゼを「悪魔の使い」とみなしたリュカの錯覚は、この女性が優れた吟唱詩人であることを証明しているとも言える。かつて古代ケルトの祭司ドルイドの中には、彼らの神話伝承を詩歌にのせて歌う役割をもつ者がいた<sup>35)</sup>。以前のまろやかさは失われたものの、その声は演壇に立てば水を得た魚のごとく生き生きと力強く、ブルジョワ資本主義の国家と「腐れ縁で結ばれた」<sup>36)</sup>教会の罪を説きつつ、それら権力に対して自由を掲げて立ち上がるよう唱導するルイーゼの語りは、古の堂々たるドルイドのそれを想起させたのに違いない<sup>37)</sup>。アルモリカ（7世紀までのブルターニュ地方の旧称）に生まれ、ケルトの熱い血をその身中に流しながらも長く権力によって踏みつけにされ、財産はおろか故郷も精神の均衡までも失ってしまったリュカは、心の闇に迷った末に、彼をもっとも深く理解する演壇の老女を自らの敵、「悪魔」と見誤ったのではなかったか。

ルイーゼはこの襲撃者を告訴せず、むしろ彼を慰め、その家族のことも気遣った。新聞雑誌に働きかけ、精神医学の大家や弁護士にも協力を要請して、リュカを釈放させることに成功する。そして同年、頭部に残る弾丸による激痛に耐え、長年の酷使によってきしむ肉体をさらにむち打ちながら、ルイーゼは『新しい世界』『時代の犯罪』を発表する。集会や講演の場では、権力が公安や秩序の維持を掲げて行う監視、法の強化、死刑制度などを、その対象が多くの場合、棄民にされた民衆であったからなおのこと、強く非難するのだった。

リュカに捧げた詩に綴られる「石の時代の先祖」「森の奥の、洞窟の時代の人」は、民衆そのものの形容でもある。ルイーゼは民衆にリュカと同様、気づかぬうちに近代社会へと投げ出された迷い子を見た。彼らはこの世界で原始の力を

<sup>35)</sup> Voir : KRUTA, Vencesras. *Les Celtes, Histoire et Dictionnaire*, Robert Laffont, 2000.

<sup>36)</sup> 「今なお、教会と国家は累々と横たわる死骸を引きずりながら腐れ縁で結ばれているが、これを分かつことは一体可能だろうか」と疑問に思う。だが、これらも消える時にはともに消えるべきなのだ。」 *La Commune, histoire et souvenirs*, p.203.

失い、かつてその力をわが身に備えていたことさえ忘れていて——ルイズはそのように理解していたのではないだろうか。民衆が内に秘める原始の力を思えば、彼らの愚かさは些細な短所に過ぎない。他の誰でもない彼ら民衆に呼びかける、彼らの吟唱詩人であることを、今やルイズは誇りとする。

間もなく『コミュン 歴史と思い出』の執筆に着手。これは未来に向けたルイズ・ミシュルの遺言と呼ぶことができるだろう。ルイズはどのような日もペンをとり、文章を綴らなくては日がくれない人物だったが、その自筆原稿の多くは警察による没収、編集者の裏切りなど波瀾の人生の中で失われたり分散することになってしまう。が、この作品だけは完全な形で刊行されている。

ルイズにとっても、歴史の証言の一つとしても記念碑的なこの作品で、著者は来る時代を次のように語っている。

人類の古き血の混じるこれら原始の人種の人々の間から、旺盛な力がほとばしり出るだろう。人間は一粒の種のように天へと伸びていく。<sup>38)</sup>

「原始の人種の人々」が民衆であることは、もはや言うまでもない。

晩年のルイズ・ミシュルは、「生きた伝説である女性市民」の献身を不可欠だと考える活動家らの要請に応じて各地を巡った。利用されていることを承知のうえで、喜んで彼女は足を運ぶ。たとえわが身が砕けようと伝えておくべき言葉があると考えていたのだ。露天の演壇で、雨風に打たれ、あるいは灼熱の太陽に焼かれながら、民衆を主役に据えた「新しい時代」の到来を預言して廻る日々。彼女は、「モンコフォンの丘」<sup>39)</sup>の廃馬のようになだれて希望さえ忘れた人々に、その原始の力を今一度思い出させ、彼らが英雄譚の子孫であり、コミュニーと呼ばれた名も無き多くの英霊の継承者であることを訴え続けた。

民衆がルイズの意図をどれだけ理解したかはまた別の問題であろう。だ

---

37) ルイズ・ミシュルは「女性美」と呼ばれる要素を除けば、女優に必要なあらゆる資質を豊かに備えていた。俳優は、ユゴーが優れた弁舌家に見出す二つの側面「思想家と俳優」(Voir : HUGO, Victor. *Œuvres complètes*, « Critiques », Robert Laffont, 1985-1987, p.231.) の一つである。

38) *La Commune, Histoire et souvenirs*, p.333.

39) パリのサン・マルタン通りの南にある丘。18世紀までは処刑場で、その後は廃馬屠殺場として使われた。ルイズは、国家という名のもとに多くの民衆が兵士となり、女性は娼婦となる以外に道のない社会を「モンコフォンの丘」と呼んだ。

が、彼らとともにあることを心から誇りとし、「来る時代の創造者」としての彼ら自身の英雄譚をも豊かに描き上げる術を知っていたがゆえに、この吟唱詩人は民衆に彼らの出自に対する誇りを与え、その魂を燃え上がらせ、その目の中に未来を映し出させることを成し得たのである。

### おわりに

けだし、ヴェルレーヌがルイズ・ミシエルに与えた「貧乏人のミューズ」<sup>40)</sup>の呼び名は的確である。十分な教育を享受できず、また泥濘にはまり込んでしまったかのように絶望と悲惨に足をとられて「思想」や「未来」という言葉の意味さえしばしば理解できなかった人々の「詩神」として、吟唱詩人ルイズ・ミシエルは夢の未来を描き出し、彼らに進むべき道を指し示したのである。

詩作品を含め、ルイズの文章には、しばしば冗長さや無用な反復、過度の感傷、高揚が見受けられ、一級の芸術作品とみなされてはいない。しかし、そうした欠点を別としても、いや、むしろその欠点ゆえに、民衆を前にした彼女の言葉はまさに市井の唱道者たるにふさわしく、力強く、そして魅力に富んでいるとも評価できる。彼女の残した言葉を声のにせる時、その苦悩、切望あるいは希望と喜びが立ち昇り、同時に、詩人が真っ直ぐに見つめ言葉を捧げる対象の感喜の表情までもがイメージとして浮かび上がる。彼女の「詩」は、白い頁におさまる作品ではなく、多くの民衆がざわめく空間に生きる言霊なのだ。

本稿では、ルイズ・ミシエルの「詩人」としての側面を取り上げ、それを成り立たせたのは「兄」ユゴーに匹敵する抒情詩人としての感性、社会の不正に対する不屈の正義感と民衆への愛によって醸される言霊、さらにパリ・コミューンの月日を通して育まれた「ア・ベ・セー」の人々の未来を語る吟唱詩人としての自負と誇りであったこと、そしてフランスはもちろん周辺の国々や旧植民地で今なお記憶され、人々の心の共和国に訴える力を失わない「ルイズ・ミシエル」は、ここに示した「民衆の吟唱詩人」の姿勢なくしてはありえなかったことを明らかにした。

「民衆詩人」ルイズ・ミシエルに関しては、晩年の演説や詩に類出する「原始」「自然」「民衆」「未来」をキーワードとして、ニュー＝カレドニアへの流刑とその地での彼女の日々の記録をあらためて紐解き、より詳細に分析していくこ

<sup>40)</sup> Voir : 注 25).

とが必要である。「永遠のコミュニーズ」という枠を越えた、このルイズ・ミシエルの姿を浮き彫りにするための次の作業は、またの機会に譲ることとしたい。

## 参考文献

- MICHEL, Louise. *La Commune - Histoire et souvenirs*, La Découverte, 1999.
- MICHEL, Louise. *Histoire de ma vie, seconde et troisième parties, Londres 1904*, Presses universitaires de Lyon, 2000.
- MICHEL, Louise. *La Misère*, Presses universitaires de Lyon, 2006.
- MICHEL, Louise. *Mémoires*, Maspero, 1977.
- MICHEL, Louise. *Prise de possession*, Jean-Paul Roche, 2005.
- MICHEL, Louise. *Je vous écris de ma nuit, Correspondance générale, 1850-1904*, Paris-Max Chaleil, 1999.
- MICHEL, Louise. *Lettres à Victor Hugo 1850-1879*, Mercure de France, 2005.
- MICHEL, Louise. *L'Homme futur aura des sens nouveaux ! - Louise Michel 1830-1905*, Collection « Voix », la Martinière/ Xavier Barral, 2004.
- [ルイーズ・ミシェル評伝]
- AUZIAS, Claire. *Louise Michel - Graine d'Ananar*, Monde Libertaire / Alternative Libertaire, 2003.
- BOYER, Irma. *Louise Michel*, Saumur, 1927.
- CAPPELLA, Émilie. *Louise Michel exil en Nouvelle-Calédonie*, Magellan & Cie, 2005.
- CHAUVIN, Clotilde. *Louise Michel en Algérie, La tournée de conférences de Louise Michel et Ernest Girault en Algérie(octobre-décembre 1904)*, Libertaires, 2007.
- DAUPHIN, Joël. *La Déportation de Louise Michel - Vérité et légendes*, Indes savantes, 2006.
- DURAND, Pierre. *Louise Michel ou la révolution romantique*, Français Réunis, 1971.
- DURAND, Pierre. *Louise Michel, la passion*, le Temps des cerises, 2005.
- GAUTHIER, Xavière. *La vierge rouge - Biographie de Louise Michel*, Paris-Max Chaleil, 1999.
- LACOSSE, Elvire. *L'enfant terrible de la liberté - La légende de Montmartre racontée par Louise Michel*, Escourbiac, 2008.
- LEJEUNE, Paule. *Louise Michel - L'Indomptable*, Harmattan, 2002.
- PLANCHE, Fernand. *La vie ardente et intrépide de Louise Michel (1830 - 1905)*, Tops / H. Trinquier, 2005.

Prénom : Louise nom : Michel 1830 – 1905, Exposition 2001, Musée de l'Histoire vivante.

THOMAS, Édith. *Louise Michel, ou, La Velléda de l'anarchie*, Gallimard, 1971.

VAN DER MOTTE, Franz : *Louise Michel*, Harmattan, 2004.

[その他]

HUGO, Victor. « À l'Arc de triomphe » « À Albert Durer » in *Les Voix intérieures*, Gallimard, 2002.

HUGO, Victor. *Choses vues*, Coll. « Quarto », Gallimard, 2002.

HUGO, Victor. *Œuvres complètes*, Robert Laffont, 1985–1987.

HUGO, Victor. « XVII Ultima Verba », *Les Châtiments*, Gallimard, 1977.

HUGO, Victor. *Les Misérables*, Tome I, Garnier, 1971.

VERLAINE, Paul. *Ballade en l'honneur de Louise Michel, Amour, Œuvres complètes*, Tome II, Editions Vanier, 1905.

ALBOUY, Pierre. *La Création mythologique chez Victor Hugo*, José Corti, 1963.

BÉNICHOU, Paul. *Romantismes Français, Tome I, Tome II*, Coll. « Quatro », Gallimard, 2004.

EICHNER, Carolyn J. *Surmounting the barricades – Women in the Paris Commune–*, Indiana University Press, 2004.

TROYAT, Henri. *Verlaine*, Flammarion, 1993.

BERNAND, Noël. *Dictionnaire de la Commune*, Mémoire du Livre, 2000.

KRUTA, Vencesras. *Les Celtes, Histoire et Dictionnaire*, Robert Laffont, 2000.

TULARD, Jean. *Dictionnaire du Second Empire*, Fayard, 1995.

大島博光『パリ・コミューンの詩人たち』新日本出版社 1989.

大佛次郎『バリ燃ゆ』朝日新聞社 2008.

持田明子『ジョルジュ・サンド 1804–76 自由, 愛, そして自然』藤原書店 2004.

アンリ・コルバン『アナーキズム』左近毅訳, 白水社 1972.

ジャン＝ポール・アロン『路地裏の女性史 19世紀フランス女性の栄光と悲惨』片岡幸彦監訳, 新評論 1984.

ジュール・ミシュレ『民衆』大野一道訳, みすず書房 1977.

セルジュ・モスコヴィツシ『群衆の時代 大衆心理学の史的考察』法政大学出版局 1984.

ルイ・シュヴァリエ『労働階級と危険な階級』みすず書房 1993.

ルイ・ル・ギュー『ラムネーの思想と生涯』伊藤晃訳，春秋社 1989.